

# 三年生の代数学

第 12 回 単項イデアル整域上の加群と単因子論

第 13 回 有限生成加群の構造定理 講義中に指示する

第 14 回 ジョルダンの標準形

<http://www.math.titech.ac.jp/~shanekelly/\%E4\%BB\%A3\%E6\%95\%B0\%E5\%AD\%A6.html>

Shane Kelly

東京工業大学

2020 年 7 月 29 日

## 1 Smith normal form

**定理 1.**  $R$  を単項イデアル整域とし、 $A = [a_{ij}]_{1 \leq i \leq n, 1 \leq j \leq m}$  を  $n \times m$  行列とする。そのとき、ある可逆行列  $P \in GL_n(R)$  と  $Q \in GL_m(R)$  が存在して、 $PAQ$  が次の形になる。

$$PAQ = \begin{pmatrix} e_1 & & & \\ & e_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & e_s \end{pmatrix}$$

ここに、空白は 0 をあらわす。

**注意 2.** 上の形だと正方行列っぽく見えるが実は  $n \times m$  行列である。

上記の定理の証明のために、 $a \in R$  に対して、 $\delta(a) = (a$  の素因数の個数) と定義する。すなわち、 $a$  を素元の積  $a = p_1^{i_1} p_2^{i_2} \dots p_n^{i_n}$  と書けば、

$$\delta(p_1^{i_1} p_2^{i_2} \dots p_n^{i_n}) = i_1 + i_2 + \dots + i_n.$$

$$\delta(0) = \infty$$

とおく。

**命題 3.**  $R$  を単項イデアル整域とする、任意の  $a, b \in R \setminus \{0\}$  に対して、可逆行列  $P \in GL_2(R)$  が存在して、

$$P \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \gcd(a, b) \\ 0 \end{pmatrix}$$

さらに、 $\delta(\gcd(a, b)) = \delta(a)$  の時、 $P = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ * & * \end{bmatrix}$  と選べる。

**証明.**  $g = \gcd(a, b)$  をおく。  $\delta(g) = \delta(a)$  とは  $a|b$  である。そのとき、

$$P = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ \frac{-b}{a} & 1 \end{pmatrix}$$

とおけば良い。その他、  $ad + bc = g$  がみたす  $c, d \in R$  を選ぶ ( $R$  が PID ですので、  $\langle a, b \rangle = \langle g \rangle$ )。

そして、行列

$$P = \begin{pmatrix} d & c \\ \frac{-b}{g} & \frac{a}{g} \end{pmatrix}$$

が補題の条件をみたす：

$$\det P = d \frac{a}{g} - c \frac{-b}{g} = \frac{ad+bc}{g} = \frac{g}{g} = 1$$

■

**命題 4.**  $R$  を単項イデアル整域とする。任意の行列

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1m} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & \dots & a_{i-1,m} \\ a_{i1} & a_{i2} & \dots & a_{im} \\ 0 & a_{i+1,2} & \dots & a_{i+1,m} \\ \vdots & \vdots & \dots & \vdots \\ 0 & a_{n2} & \dots & a_{nm} \end{pmatrix}.$$

に対して、  $P \in GL_n(R)$  が存在して、

$$PA = \begin{pmatrix} b_{11} & b_{12} & \dots & b_{1m} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{i-1,1} & a_{i-1,2} & \dots & a_{i-1,m} \\ 0 & b_{i,2} & \dots & b_{i,m} \\ 0 & a_{i+1,2} & \dots & a_{i+1,m} \\ \vdots & \vdots & \dots & \vdots \\ 0 & a_{n2} & \dots & a_{nm} \end{pmatrix}.$$

さらに、

$$\delta(b_{11}) < \delta(a_{11}).$$

か

$$a_{11} = b_{11}, a_{12} = b_{12}, \dots, a_{1m} = b_{1m}$$

のどちらかをみたす  $P$  を選ぶことができる。

**証明.** 三つの場合を対処する。

$a_{i,1} = 0$  のとき、何もしなくても良い。

$a_{1,1} = 0$  のとき、1行目と  $i$ 行目を入れ替え行列

$$\begin{pmatrix} 1 & & 0 \\ & Id_{i-2} & \\ 0 & & 1 \\ & & & Id_{n-i} \end{pmatrix}.$$

を選ぶ。ここに、空白は 0 をあらわし、 $Id_j \in GL_j(R)$  は単位行列である。

$a_{11} \neq 0$  かつ  $a_{1i} \neq 0$  のとき、命題 3 において  $a_{11}, a_{1i}$  に対応する行列  $P = \begin{bmatrix} p_{11} & p_{12} \\ p_{21} & p_{22} \end{bmatrix}$  を用い、

$$\begin{pmatrix} p_{11} & & p_{12} & & \\ & Id_{i-2} & & & \\ p_{21} & & p_{22} & & \\ & & & & Id_{n-i} \end{pmatrix}.$$

を選ぶ。 ■

**命題 5.**  $R$  を単項イデアル整域とする、任意の行列

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1m} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nm} \end{pmatrix}.$$

に対して、 $P \in GL_n(R)$  が存在して、

$$PA = \begin{pmatrix} b_{11} & b_{12} & \cdots & b_{1m} \\ 0 & b_{22} & \cdots & b_{2m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ 0 & b_{n2} & \cdots & b_{nm} \end{pmatrix}.$$

さらに、

$$\delta(b_{11}) < \delta(a_{11}).$$

か

$$a_{11} = b_{11}, a_{12} = b_{12}, \dots, a_{1m} = b_{1m}$$

のどちらかをみたす  $P$  を選ぶことができる。

**証明.** 命題 4 から従う。 ■

**命題 6.**  $R$  を単項イデアル整域とする、任意の行列

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \cdots & a_{1m} \\ a_{21} & a_{22} & \cdots & a_{2m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \cdots & a_{nm} \end{pmatrix}.$$

に対して、 $P \in GL_n(R), Q \in GL_m(R)$  が存在して、

$$PAQ = \begin{pmatrix} b_{11} & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & b_{22} & \cdots & b_{2m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ 0 & b_{n2} & \cdots & b_{nm} \end{pmatrix}.$$

**証明.** 命題 5 とその転置を用いると、

$$B_1 = P_1 A, \quad B_2 = P_1 A Q_1, \quad B_3 = (P_2 P_1) A Q_1, \quad B_4 = (P_2 P_1) A (Q_1 Q_2), \quad \dots$$

が与えられる。左上成分の  $\delta$  が減るから、ある  $N$  に対して、 $B_N = B_{N+1} = B_{N+2} = \dots$  で、これらが命題の  $PAQ$  の形になる。 ■

**命題 7.**  $R$  を単項イデアル整域とする、任意の行列

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & & & & & \\ & \ddots & & & & \\ & & a_{ii} & a_{i,i+1} & \cdots & a_{im} \\ & & a_{i+1,i} & a_{i+1,i+1} & \cdots & a_{i+1,m} \\ & & \vdots & \vdots & & \vdots \\ & & a_{ni} & a_{n,i+1} & \cdots & a_{n,m} \end{pmatrix}.$$

に対して、 $P \in GL_n(R), Q \in GL_m(R)$  が存在して、

$$PAQ = \begin{pmatrix} a_{11} & & & & & \\ & \ddots & & & & \\ & & a_{i+1,i+1} & & & \\ & & & a_{i+2,i+2} & \cdots & a_{i+2,m} \\ & & & \vdots & & \vdots \\ & & & a_{n,i+2} & \cdots & a_{n,m} \end{pmatrix}.$$

**証明.**

$$\begin{pmatrix} a_{ii} & a_{i,i+1} & \cdots & a_{im} \\ a_{i+1,i} & a_{i+1,i+1} & \cdots & a_{i+1,m} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ a_{ni} & a_{n,i+1} & \cdots & a_{nm} \end{pmatrix}$$

に対して命題 6 の  $P, Q$  を用いると、

$$\begin{pmatrix} id_i & \\ & P \end{pmatrix} A \begin{pmatrix} id_i & \\ & Q \end{pmatrix}$$

が正しい形になる。 ■

定理の証明. 命題 7 から従う。 ■

## 2 PID 上の加群

**定理 8.**  $M$  を単項イデアル整域  $R$  上有限生成加群とする. 同型

$$M \cong R^{\oplus d} \oplus \bigoplus_{\text{素元 } p \in R} \left( \left( \frac{R}{(p)} \right)^{\oplus e_{p,1}} \oplus \left( \frac{R}{(p)^2} \right)^{\oplus e_{p,2}} \oplus \left( \frac{R}{(p)^3} \right)^{\oplus e_{p,3}} \oplus \cdots \right)$$

が存在する。ここに、 $d, e_{p,j} \in \mathbb{N}$ 、有限個を除いて  $e_{p,j}$  がゼロである。さらに、 $d, e_{p,j}$  は一意に定まる。

**例 9.** 1.  $R = \mathbb{Z}$  とき、有限生成アーベル群の基本定理になる。

2.  $R$  が離散付値環で、 $\langle \pi \rangle$  が極大イデアルであれば、(例えば、

$$R = \mathbb{C}[[t]] = \left\{ \sum_{i=0}^{\infty} a_i t^i \mid a_i \in \mathbb{C} \right\}, \quad \pi = t$$

とか

$$R = \mathbb{Z}_{(p)} = \left\{ \frac{a}{b} \mid b, p \text{ 互いに素} \right\}, \quad \pi = p$$

とか),

$$M \cong R^{\oplus d} \oplus \left(\frac{R}{(\pi)}\right)^{\oplus e_1} \oplus \left(\frac{R}{(\pi)^2}\right)^{\oplus e_2} \oplus \cdots \oplus \left(\frac{R}{(\pi)^N}\right)^{\oplus e_N}$$

**命題 10.**  $N \subseteq R^{\oplus n}$  が部分加群であれば、ある  $m \leq n$  について、 $R$  加群同型  $N \cong R^{\oplus m}$  が存在する。

**証明.** 射影

$$\pi : R^{\oplus n} \rightarrow R; \quad (b_1, \dots, b_n) \mapsto b_n$$

を考えよう。その核は

$$\ker(\pi) = \{(b_1, b_2, \dots, b_{n-1}, 0) \mid b_i \in R\}$$

である。

$$N' = N \cap \ker(\pi) = \{(b_1, b_2, \dots, b_n) \in N \mid b_n = 0\}$$

とおく。帰納法によって  $N'$  を生成する

$$\begin{aligned} a_1 &= (a_{1,1}, \dots, a_{1,n_1}, 0, \dots, 0, \dots, 0) \\ a_2 &= (a_{2,1}, \dots, a_{2,n_1}, \dots, a_{2,n_2}, 0, \dots, 0, \dots, 0) \\ &\vdots \\ a_m &= (a_{m,1}, \dots, a_{m,n_1}, \dots, a_{m,n_2}, \dots, a_{m,n_m}, 0, \dots, 0) \end{aligned}$$

が存在する。ここに、 $a_{ij} \in R$ ,  $a_{i,n_i} \neq 0$ ,  $n_1 < n_2 < \cdots < n_m$ 。もし  $N' = N$  であれば、以上です。 $N/N' \neq \{0\}$  であれば、 $\pi(N) \neq \{0\} \subseteq R$  となって、 $R$  加群として、 $\pi(N)$  を生成する  $0 \neq c_n \in R$  が存在する ( $R$  の部分加群はイデアル、 $R$  が PID)。したがって、 $c + N'$  が  $R$  加群として  $N/N'$  を生成する  $c = (c_1, \dots, c_{n-1}, c_n) \in R^{\oplus n}$  が存在する。

そうすると、

$$\begin{aligned} a_1 &= (a_{1,1}, \dots, a_{1,n_1}, 0, \dots, 0, \dots, 0) \\ a_2 &= (a_{2,1}, \dots, a_{2,n_1}, \dots, a_{2,n_2}, 0, \dots, 0, \dots, 0) \\ &\vdots \\ a_m &= (a_{m,1}, \dots, a_{m,n_1}, \dots, a_{m,n_2}, \dots, a_{m,n_m}, 0, \dots, 0) \\ c &= (c_1, \dots, c_{n-1}, c_n) \end{aligned}$$

が  $N$  を  $R$  加群として生成する： $n \in N$  をとって、 $c + N'$  が  $N/N'$  を生成するから、ある  $b \in R$  について  $bc + N' = n + N'$ 。すなわち、 $bc - n \in N'$ 。元  $a_i$  が  $N'$  を生成するので、ある  $b_1, \dots, b_m$  について  $bc - n = \sum_{i=1}^m b_i a_i$ 。したがって、 $n = bc + \sum_{i=1}^m b_i a_i$ 。 ■

**注意 11.** ツォルンの補題を用いると、上記の補題の有限生成仮定を外すことができ、 $M$  と  $N$  が一般的な自由加群になる。

定理の証明.  $M$  が有限生成加群とは全射  $\pi : R^{\oplus n} \rightarrow M$  が存在することである。命題によって、 $\pi$  の核が  $R^{\oplus m}$  に同型である。すなわち、単射  $\iota : R^{\oplus m} \rightarrow R^{\oplus n}$  が存在して、

$$0 \rightarrow R^{\oplus m} \xrightarrow{\iota} R^{\oplus n} \xrightarrow{\pi} M \rightarrow 0$$

が「完全系列」になる。

**定義 12.**  $R$  加群準同型

$$M_{i_0} \rightarrow \dots \rightarrow M_{i-1} \xrightarrow{\phi_i} M_i \xrightarrow{\phi_{i+1}} M_{i+1} \rightarrow \dots \rightarrow M_{i_n}$$

が完全系列であるとは、任意の  $i$  に対して、

$$\text{im}(\phi_i) = \ker(\phi_{i+1})$$

が成立することである

自由加群の準同型  $\iota$  に対応する  $n \times m$  行列  $A$  を考えよう. 可逆行列  $P, Q$  が存在して、

$$PAQ = \begin{pmatrix} e_1 & & & \\ & e_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & e_m \end{pmatrix}.$$

そうすると、行が完全系列である可換図式を得られる.

$$(b_1, \dots, b_m) \mapsto (e_1 b_1, \dots, e_m b_m, 0, \dots, 0)$$

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \longrightarrow & R^{\oplus m} & \xrightarrow{PAQ} & R^{\oplus n} & \longrightarrow & \left( \bigoplus_{i=1}^m R/\langle e_i \rangle \right) \oplus R^{\oplus n-m} \longrightarrow 0 \\ & & \uparrow Q^{-1} & & \uparrow P & & \\ 0 & \longrightarrow & R^{\oplus m} & \xrightarrow{A} & R^{\oplus n} & \longrightarrow & M \longrightarrow 0 \\ & & b & \mapsto & Ab & & \end{array}$$

ここに、 $e_1, \dots, e_m$  はゼロや可逆元である可能性もある。

$P$  と  $Q$  が同型を誘導するから、「図式追跡」によって、同型

$$M \cong \left( \bigoplus_{i=1}^m R/\langle e_i \rangle \right) \oplus R^{\oplus n-m}$$

が存在する. もしくは準同型定理によって、 $P$  が同型のおかげで、誘導される準同型

$$\frac{R^{\oplus n}}{\phi(R^{\oplus m})} \xrightarrow{P} \frac{R^{\oplus n}}{\iota(R^{\oplus m})}$$

は同型である. ここに、 $\iota$  は  $A$  に対応する準同型で、 $\phi$  は  $PAQ$  に対応する準同型である.

最後に、各  $e_i$  を素元の積  $e_i = p_1^{j_1} p_2^{j_2} \dots p_n^{j_n}$  として書けば、中国の剰余定理によって、同型

$$R/\langle e_i \rangle \cong \left( \frac{R}{\langle p_1^{j_{i1}} \rangle} \right) \oplus \left( \frac{R}{\langle p_2^{j_{i2}} \rangle} \right) \oplus \dots \oplus \left( \frac{R}{\langle p_n^{j_{in}} \rangle} \right)$$

となる.

一意性を証明するために同型

$$\begin{aligned} R^{\oplus d} \oplus \bigoplus_{\substack{\text{素元} \\ p \in R}} \bigoplus_{j \geq 1} \bigoplus_{i=1}^{e_{p,j}} \frac{R}{\langle p^j \rangle} &\cong M \\ &\cong M' \cong R^{\oplus d'} \oplus \bigoplus_{\substack{\text{素元} \\ p \in R}} \bigoplus_{j \geq 1} \bigoplus_{i=1}^{e'_{p,j}} \frac{R}{\langle p^j \rangle} \end{aligned}$$

とし、素元  $p$  において  $R/\langle p \rangle$  ベクトル空間  $p^n M/p^{n+1}M$  を考えよう。素元  $p, q$  は違えば、 $R/\langle q \rangle$  で  $p$  が可逆元になる。ゆえに、

$$p^n \frac{R}{\langle q^j \rangle} / p^{n+1} \frac{R}{\langle q^j \rangle} \cong \frac{R}{\langle q^j \rangle} / \frac{R}{\langle q^j \rangle} = 0 \quad (1)$$

さらに、 $n \geq j$  のとき、 $p^n \frac{R}{\langle p^j \rangle} \cong 0$  で、

$$p^n \frac{R}{\langle p^j \rangle} / p^{n+1} \frac{R}{\langle p^j \rangle} = 0, \quad n \geq j \quad (2)$$

となる。  $p^n$  と掛けれる準同型  $\phi_{p^n}$  は  $R/\langle p \rangle$  同型

$$\phi_{p^n} : R/\langle p \rangle \xrightarrow{\sim} p^n R/p^{n+1}R; \quad a + pR \mapsto p^n a + p^{n+1}R \quad (3)$$

となる。同様に、 $n < j$  の場合に、

$$\phi_{p^n} : R/\langle p \rangle \xrightarrow{\sim} p^n \frac{R}{\langle p^j \rangle} / p^{n+1} \frac{R}{\langle p^j \rangle}, \quad n < j \quad (4)$$

したがって、ある  $N$  に対して、上記の  $R$  同型 (1)、(2)、(3)、(4) は  $R/\langle p \rangle$  同型

$$p^n M/p^{n+1}M \cong \left( \frac{R}{\langle p \rangle} \right)^{\oplus d} \oplus \bigoplus_{j > n} \left( \frac{R}{\langle p \rangle} \right)^{\oplus e_{p,j}}$$

になる。同様に、

$$p^n M'/p^{n+1}M' \cong \left( \frac{R}{\langle p \rangle} \right)^{\oplus d'} \oplus \bigoplus_{j > n} \left( \frac{R}{\langle p \rangle} \right)^{\oplus e'_{p,j}}$$

同型なベクトル空間の次元が等しいですので、任意の  $p, n$  に対して

$$\begin{aligned} d + e_{p,n+1} + e_{p,n+2} + e_{p,n+3} + \dots \\ = d' + e'_{p,n+1} + e'_{p,n+2} + e'_{p,n+3} + \dots \end{aligned}$$

がわかる。したがって、 $d = d'$ ,  $e_{p,j} = e'_{p,j} \quad \forall p, j$ . ■

### 3 Jordan 標準形

**定理 13.**  $V$  を代数閉体  $k$  上の有限次元ベクトル空間とし、 $\phi : V \rightarrow V$  を線型写像とする。同伴な行列が次の形になる基底が存在する。

$$\begin{pmatrix} J_1 & & & \\ & J_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & J_n \end{pmatrix}$$

ここに、空白は 0 をあらわし、ある  $\lambda_i$  に対し、 $J_i$  は次の形になる正方行列である。

$$\begin{pmatrix} \lambda_i & 1 & & \\ & \lambda_i & 1 & \\ & & \ddots & 1 \\ & & & \lambda_i \end{pmatrix}.$$

**証明.** スカラー倍

$$k[T] \times V \mapsto V; \quad \left( \sum_{i=1}^n a_i T^i, v \right) \mapsto \sum_{i=1}^n a_i \phi^i(v)$$

を定義すると、 $V$  は  $k[T]$  加群になる。ここに、 $\phi^i = \underbrace{\phi \circ \phi \circ \cdots \circ \phi}_{i \text{ 部数}}$ 、 $k$  ベクトル空間  $V$  は有限次元  
 ですので、 $k[T]$  加群  $V$  は有限生成である。したがって、 $k[T]$  加群同型

$$V \cong k[T]^{\oplus d} \oplus \left( \bigoplus_{i=1}^n \bigoplus_{j=1}^m \bigoplus_{k=1}^{e_{i,j}} \frac{k[T]}{(p_i(T))^j} \right)$$

が存在する。ここに、 $p_i(T) \in k[T]$  は既約元である。 $k$  が代数閉体であるから、ある  $\lambda_i \in k$  に対して  $p_i(T) = T - \lambda_i$ 。上記の同型は  $k$  ベクトル空間同型でもある。左側の次元は有限ですので、右側の次元も有限である。ゆえに、 $d = 0$ 。ゆえに、

$$V \cong \bigoplus_{i=1}^n \bigoplus_{j=1}^m \bigoplus_{k=1}^{e_{i,j}} \frac{k[T]}{(T - \lambda_i)^j}$$

右側の自己準同型  $f \mapsto Tf$  を  $\phi_T$  と表そう。

$$\begin{array}{ccc} V & \cong & \bigoplus_{i,j,k} \frac{k[T]}{(T - \lambda_i)^j} \\ \downarrow \phi & & \downarrow \phi_T \\ V & \cong & \bigoplus_{i,j,k} \frac{k[T]}{(T - \lambda_i)^j} \end{array}$$

は可換図式ですので、 $\phi_T$  の行列が

$$\begin{pmatrix} J_1 & & & \\ & J_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & J_n \end{pmatrix}$$

になる右側の基底を見つけたら良い。明らかに、 $\frac{k[T]}{(T - \lambda)^j}$  の場合を扱えば良い。 $k$  ベクトル空間として、元

$$\overline{(T - \lambda)^{j-1}}, \overline{(T - \lambda)^{j-2}}, \dots, \overline{T - \lambda}, \overline{1}, \in \frac{k[T]}{(T - \lambda)^j}$$

が基底をなす。この基底に対して線型写像

$$\phi_T : \frac{k[T]}{(T - \lambda)^j} \rightarrow \frac{k[T]}{(T - \lambda)^j}; \quad \overline{f(T)} \mapsto \overline{Tf(T)}$$



に対応する行列は

$$\begin{pmatrix} \lambda & 1 & & \\ & \lambda & 1 & \\ & & \ddots & 1 \\ & & & \lambda \end{pmatrix}$$

である. ■

**注意 14.**  $n \times n$  行列

$$J = \begin{pmatrix} \lambda & 1 & & \\ & \lambda & 1 & \\ & & \ddots & 1 \\ & & & \lambda \end{pmatrix}$$

は  $(T - \lambda \cdot Id_n)^n = 0$  をみたす. より一般に行列

$$\begin{pmatrix} J_1 & & & \\ & J_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & J_n \end{pmatrix} \quad \left( \text{ここに、} J_i = \begin{pmatrix} \lambda_i & 1 & & \\ & \lambda_i & 1 & \\ & & \ddots & 1 \\ & & & \lambda_i \end{pmatrix} \right)$$

の固有値は  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  で、最小多項式は  $(T - \lambda_1)^{j_1} \dots (T - \lambda_n)^{j_n}$  である. ここに、 $j_i = J_i$  の大きさである.